

# 図書館だより

第34号 令和8年3月発行



大島商船高等専門学校図書館

山口県大島郡周防大島町大字小松1091番地1

## 目 次

## 巻頭言

温故知新	図書館長	野本 敏生	1
------	------	-------	---

## 第23回読書感想文コンクール優秀作品発表

## 最優秀賞

本当の正しさとは、何か。	商船学科2年	福元 佳恵	2
--------------	--------	-------	---

## 優 秀 賞

置かれた場所で咲くために	情報工学科1年	友森 優衣	3
--------------	---------	-------	---

注文と教訓	情報工学科2年	高嶋 俊平	4
-------	---------	-------	---

## 佳 作

自分の見る世界を再認識	商船学科3年	村尾 虹大	5
-------------	--------	-------	---

嘘と幻と	電子機械工学科3年	岡田 紘	6
------	-----------	------	---

油断が招いた森の罠	商船学科2年	高橋 亮	7
-----------	--------	------	---

孤独を超えて	情報工学科1年	平山 夏音	8
--------	---------	-------	---

## 第5回読書ラリー優秀者発表 9

## 推薦図書

地球 ―その中をさぐる―	商船学科	酒井 秋絵	10
--------------	------	-------	----

「もう差別なんてない」と思っているあなたへ	一般科目	中原 瑞公	11
-----------------------	------	-------	----

アメリカの経験から日本の<sup>いま</sup>現在と<sup>これから</sup>未来を考える

## ブックハンティングに参加して 12

## 図書館利用状況 15

## 巻頭言

# 温故知新



図書館長 野本 敏生

昨年4月二度目の図書館長に就任し、はや一年になる。前回の本稿で図書館の改修工事が決まったことをお伝えしていたが、リニューアルされた建物は5年たってもまだ清潔さを保っている。ただ修繕内容にはいくつか誤算があり、例えば閲覧室裏の書庫が手つかずのまま、収納できる資料に限界があるため、経年劣化した書籍は国会図書館など他の図書館での収蔵が確認できれば破棄することになっていた。教科書の執筆に参加した経験から、1冊の書籍の編纂発行には多くの方の汗や涙が流されていることを実感した私としては、手狭となった書庫の拡張がなされず創立以来収蔵されてきた書籍を順次破棄していかなければならないことは忸怩たる思いを禁じ得ない。

100年足らずの寿命しかない人類にとって自分の経験値を挙げる方法として、実生活の体験のみならず、映画やテレビドラマを視聴すること、また小説や随筆などの読書に依拠しなければならない。小説や映画の主人公になったつもりでストーリーに埋没し、自分だったらどう感じ、どう行動するかを妄想することは、将来体験するかもしれない試練や困難さの模擬訓練や心構えとなろう。

さて近時、日本のみならず世界的に保守的な主張の人氣が高まり、保守政党や保守派グループの台頭が顕著である。SNSで目立つための極端な主張が視聴数を稼ぎ、同様の主張を何度も目にしていると、それが正論のように思えてしまうことが一つの要因であろうか。彼らは第二次世界大戦以前の国粹主義や軍国主義に賛同する者ではないというが、当時も初めは民族自決主義から一民族一国家をめざす独立運動を支える思想であったものが、いつしか自民族の優位性を喧伝し、他民族との対立の正当性を主張する根拠となり、「自国の国益を守るための武力行使はやむなし」とされた。そして、反戦を唱える人々を非国民として非難し、政治犯として処罰することで彼らの口をふさいでしまった。

その反省に立ち、日本国憲法では国民の表現の自由や政治活動の自由を含む基本的人権の保障と国民主権を基本原理とした。また、国連は人権保障を内政不干渉の例外として、国民の生存権や自由権を脅かす国家体制を批判し、民主主義国家の樹立を促してきた。さらに国連は、国益優先から人類益の実現のため、一国では解決できない環境問題などの解決策を継続的な対話を通じて見出そうと努力し、2015年には「持続可能な開発目標（SDGs）」を定め、2030年に向けてどの国・地域においても人類の平和的な生存と個人の尊厳を保障しようとキャンペーンを行っている。

戦争体験世代が減少し、「過ちは繰り返さない」という過去の教訓の意識が薄れゆくことは歴史の必然かもしれない。しかし、平和の尊さや安全な日常を再確認するためにも、学生の皆さん、多種多様な書籍を読むことを通じて過去の歴史に目を向け、将来の日本のあるべき姿、また希望あふれる自分の生活様式や安全な未来社会を展望してみてください。

# 最優秀賞

## 本当の正しさとは、何か。

『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』

ブレイディ みかこ 著 新潮文庫

商船学科2年 福元 佳恵

この本を読み終えたとき、私は「自分が当たり前だと思っていることは、本当に正しいことなのか」と考えた。この本をざっくり説明すると、イギリスで暮らす日本人の母と、アイルランド人の父をもつ少年の成長を描いたエッセイである。また、タイトルの「イエロー」はアジア人、「ホワイト」は白人、そして「ちょっとブルー」は、彼が抱える心の揺れや迷いを意味しているのではないかと感じた。

物語の舞台は、貧困や人種の違いが色濃く残るイギリスの公立中学校だ。主人公は成績も良く、家庭も比較的恵まれているが、彼自身が選んだ学校には家庭事情が複雑な生徒も多く、時には暴力や差別のような出来事も起こる。そんな環境の中で、彼は「自分は何者なのか」「正しいとは何か」を考えながら成長していく。私が印象に残っている所は「ぼく」がクラスメイトに理不尽な差別発言をされる場面だ。彼はそのとき、怒りや悲しみを感じながらもすぐに言い返すことができなかった。母親にそのことを話すと、母は「正義とは簡単に言えるものじゃない」と語る。正しいと思って行動しても、周囲からは反感を買うこともある。けれど、黙って見過ごすこともまた、誰かを傷つけることになる。私はこの場面を読んで、もし「ぼく」の立場だったら悔しい気持ちはありつつ、反論することはできないと思った。

また、「正義」とは人を裁くための言葉ではなく、誰かを守るために考え続けることなのだと思う。登場人物たちの様々な背景の違いが、単なる「多様性」の美談ではなく、現実の厳しさをも映している点にも心を動かされた。例えば、同じクラスの友人の一人は貧困家庭で、日常的に暴力や犯罪に巻き込まれている。社会の構造によって生まれてしまう不公平さが、「ぼく」は肌で感じていく。その姿を通して、私は日本の社会にも、目に見えない差別や格差が確かに存在していることを思い知らされた。

私の通っていた中学校では、そんな差別や格差について学んだり考えたりする取り組みを多く行ってきた。その中の一つに、部落差別について触れたことがある。私の中学校の校区内にかつて部落差別があった地域が実際に存在していて、ただそこに住んでいるだけなのに、汚れとして扱われたり、ひどい言葉を言われたりしていたことを知った。私はその話を聞いてとても悔しいと感じたことを覚えている。なぜその特定の地域に住んでいるだけで差別されなくてはならないのかと感じた。こんなことは絶対に起きてはならない。しかし、どうすれば起こらないかといくら考えても何一つ解決策は考えつかなかった。解決策など簡単に出るわけもなく、難しい問題だった。

また、中学校の時、同じクラスにフィリピン人のクラスメイトがいた。卒業の時にはなくなりつつあった、言葉の壁が私たちと彼女の間にあるのを始めはすごく感じた。最初はどのように接していいかも分からず、「自分にできることはない」と勝手に決めつけていた。今、思えばあの時少しも勇気を出していたらその行動こそが、本当の「優しさ」だったかもしれない。この本の「ぼく」は、最初から完璧な人間ではなく、迷い、間違い、反省をくり返しながらかつた自分の答えを探していく。その姿がとても人間らしく、共感できた。私もまた、すぐ決めつけず、考えながら行動できる人でありたい。

読み終わって、私は自分の中の「無意識の偏見」についても考えた。自分と違う人を見たとき、つい「少し怖い」「関わりづらい」と感じてしまうことがある。そうした感情の裏には、社会が作り上げた偏見や固定観念があるのかもしれないが、そうした「当たり前」を疑い、自分の中の小さな差別心に気づくきっかけを与えてくれた。『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』は単なる「多文化共生」がテーマではない。むしろ、違いがあるからこそ生まれる摩擦や痛みを真正面から描いている。けれど、その痛みの中にこそ、人間らしさや優しさが宿っているのだとこの本は教えてくれる。

私はこの本を読み、世界の不平等や差別は簡単にはなくなれないと感じた。しかし同時に、理解しようとする心や、語り合おうとする意志があれば、少しずつでも前に進めるのではないかと考えた。これから社会に出て、様々な人と関わる時、この本で学んだ「対話する勇気」を忘れずにいたい。また、いろいろな色を持つ一人の人間として、他者との違いを恐れず、自分の色を大切にしながら生きていきたい。

# 優秀賞

## 置かれた場所で咲くために

『置かれた場所で咲きなさい』 渡辺 和子 著 幻冬舎文庫  
情報工学科1年 友森 優衣

戦後八十年、現在の日本に直接的な脅威はないが、世界では戦争が続いており、ニュースや新聞で戦争や紛争の報道が毎日のように流れている。ミサイルでコンクリート製のマンションが粉々に破壊される映像。森の中で塹壕を掘りながら銃を撃つ女性。未来ある若者たちは尊厳を守るため、お国のために戦うと言っていた。血だらけの幼い子供が病院に運び込まれたが病床は傷を負った人でいっぱいになっている。眼を背けたくなるような話だがこれらは紛れもない事実だ。命が一瞬で奪われる戦争の残酷さ、傷つき疲弊する幼い子供や家族の姿に胸が締め付けられた。今この時も人々が争い、家や街、そして命を焼こうとしていると思うと心底恐ろしい。人は簡単に死ぬ。そんな当たり前の事実が戦争の悲劇を通じて突き付けられると、日常の何気ない瞬間がどれほど大切かを実感する。そんな時にこの本に出会った。

『置かれた場所で咲きなさい』はどんな環境であろうとそこで最善を尽くして生きようとする心の持ちようを教えてくれる、多くの言葉が詰まったエッセイだ。著者の渡辺和子さんは、一九二七年生まれで、第二次世界大戦や太平洋戦争などが起こった時代を若者として経験した。戦後の生きていくだけで大変な時期に、修道女として活動を始めた。多くの人々に寄り添いながら真心と信念を持って活動し、過酷な時代を生き抜いた、その強さが本書の言葉に宿っていると思う。そして、過去の悲劇や他人の行動は変えられないが、自分の心がけと時間の使い方、今これからを変えられるということを教えてくれていると思う。

「時間の使い方はそのまま命の使い方」という印象に残った言葉がある。日々流されて生活している身には突き刺さる言葉だ。この言葉は命の有限さを強く意識させる。今この世に生きている誰しも、明日が来る保証はない。戦時中であればなおさらだ。戦火のなかで、一瞬一瞬を大切に生きた人々は時間を命そのものとして扱ったのではないだろうか。そして、著者は生き急ぐよりも心にゆとりをもったほうがよいという。生きていくなかで自分の為や目的の為だけに進むのではなく、ささやかな愛や感謝、周りをいつくしむ心を持つことで、人生により生きる甲斐を見出せるのだ。

日常生活の中でも、著者の教えには、今を大切に生きるためのヒントがたくさんある。命には限りがあるということを受け入れ、過去や未来にとらわれすぎずに今を精一杯生きようと思えるように。平和な今を当たり前と思わず、目の前の物事を大事にしよう、人とのかかわりを大切にしよう、この本は教えてくれるのだ。

広島市立基町高等学校の生徒が被爆者の記憶と証言に基づいて「原爆。絵」を描いている。暗く、怖く、痛々しい人々の絵だ。それは後世に戦争のむごさや過酷さを強く伝える絵である。被爆者の方々が当時の光景と記憶をたどりながら証言し、その言葉を高校生たちが絵筆に乗せる。伝える方も受け取る方も辛くきついことだろう。しかし、何度も対面を重ね気持ちを伝え合い、少しでもこの絵で戦争や原爆の事実が絵を見た人たちに響くようにと絵を描く。その姿には気迫がこもって見えた。まさしくこの活動は私と同年代の高校生が自分たちが今ここでできることなんだろうかと考え、置かれた場所で咲こうとしているのではないだろうか。

心に傷を抱えた人や、悩みに苦しむ人に、きっとこの本書に溢れる暖かいメッセージは響くはずだ。また、悩みなど無くとも、今生きている人のそれぞれに寄り添い、心にしみる言葉があるだろう。私自身渡辺和子さんのように、家庭や学校での悩みや試練を前向きにとらえ、少しずつでも乗り越えられるようになりたい。私を支えてくれる多くの人々がいる事、今を生きていられることに感謝を忘れずにいたい。これからも多くのことを学び様々な人とかかわって、体験し共感しながら成長していきたい。いずれ自分らしく置かれた場所で咲くために、たくさんの蕾を作っていくのだ。

# 優秀賞

## 注文と教訓

『注文の多い料理店』 宮沢 賢治 著 角川文庫

情報工学科2年 高嶋 俊平

宮沢賢治の『注文の多い料理店』は、表面的には現実には起こりそうもないような話でありながら、その内側には現代の文明社会への批判と人間性の本質に関する深い洞察が込められていると思いました。そして僕は、人間の傲慢さと自然への畏敬、そして真の豊かさとは何なのかについて考えました。

この物語は二人の紳士の人物像が明確に描かれています。彼らは都市部の裕福な階層に属していて、娯楽としての狩りのために山奥までやってきました。彼らにとって自然は征服すべき存在で、動物の命は金銭的価値でしか測られません。猟犬が不可解な死を遂げた時も、「いくらくらいの損害だろう」とお金の計算をする彼らの反応は、資本主義社会における人間の価値観を象徴していると思いました。つぎは、この物語の核心部分である山猫軒での出来事に触れたいと思います。

「注文の多い料理店」という看板は、言語の持つ多義性を巧みに利用した宮沢賢治の文学的技巧を表しています。客に対する「注文」と、料理としての人間への「注文」という意味の転換は、読者に衝撃を与えたいと思います。しかし、僕が最も注目したのは二人の紳士がこの状況を合理化し続ける心理的なメカニズムです。彼らは明らかに不自然な注文に対して、「電気を使う料理があるから金属は危険」「西洋料理だから身だしなみが大切」といった理由をつけます。このことに対して、僕たちの日常生活でもやりたくないことや不都合なことから目をそらすなど似たような考え方をするとあると考えました。例えば、明日やるという宿題をしなかったり、お風呂に入るのがめんどくさくてそのまま寝てしまうことなどです。「注文の多い料理店」の二人の紳士は、まさにそうした現代人の縮図だと思いました。彼らの滑稽さや愚かさは、読者に笑いを誘うと同時に、自己反省を促すと考えました。

狩る側だった彼らが、一転して狩られる側になったときの恐怖。この立場の逆転は、人間が生態系の頂点に立っているという思い込みがいかに脆弱な基盤の上に成り立っているかを示していると感じました。僕はここで、人間の文明がどれほど自然環境に依存しているかを改めて実感しました。気候変動や生物多様性の損失といった現代的課題を考えると、僕たち人間もまた自然界の一部に過ぎず、生態系のバランスが崩れれば存続できない存在だと感じました。そして、人類が自然を「管理」と錯覚している事態が、最大の過信であるようにも感じました。

しかし、宮沢賢治は、単に人間の愚かさを糾弾するだけでなく、救済の可能性も示しています。死んだはずの猟犬が現れて二人を救うという結末は自然の持つ寛容さと慈悲を表示していると思いました。この犬たちは、利害関係を越えた純粋な忠誠心によって二人を守りました。彼らの行動は、打算的な人間関係とは対照的な、無償の愛の象徴であると感じました。僕はこの場面に人間と自然が本来持つべき調和的な関係性のヒントを見出しました。このような動物との絆は、人間が失いつつある「命とのつながり」の感覚を呼び覚ましてくれると思いました。

ただし、二人の顔がしわしわになって、もとに戻らなかったという結末は重要な意味を持つと思いました。これは、過ちの代償として残る永続的な傷跡であり、彼らが体験した恐怖と学んだ教訓の証でもあったと思います。真の学びは、表面的な理解ではなく、身体的・精神的な体験を通じて刻み込まれるものなのだと思います。

僕自身も、この物語を読むことによって日常の当たり前を見つめなおすきっかけを得られました。毎日食べるごはんも誰かが働くことと自然の恵みによって成り立っていると思いました。また、便利な現代の生活の裏側で、どれほどの資源が消費されて、どれだけの環境負荷が生じているかについても意識するようになりました。一見するとただの風変わりな童話のように見えるこの作品が、ここまで現代的なテーマを含んでいることに驚きました。グローバル化が進み、テクノロジーが発達した現代社会においても、人間の根本的な問題は変わっていないと感じました。物質的な豊かさを追求するあまり、精神的な豊かさを見失い、自然環境を破壊し続ける現代文明に対して、宮沢賢治は100年前から警鐘を鳴らしていたんだと思いました。今後は消費者として、また社会の一員として、より責任ある選択を心がけていきたいと思いました。『注文の多い料理店』は、僕にいろいろなことを見つめなおす機会を与えてくれたと思います。

# 佳作

## 自分の見る世界を再認識

『進化しすぎた脳』 池谷 裕二 著 講談社

商船学科3年 村尾 虹大

私は、七月に開催された全国大会を以ってカッター部の部長の任を引き継いだ。一チーム十四人の約二チームが集まるこの部では、勝負にこだわりたい選手から純粋に楽しみたい選手まで幅広い仲間が集まっている。十月に開催される瀬戸内大会へ向けた短期集中の練習態勢を模索する中で、勝負以前に求められる「合わせ」について考えていた時に課題図書の『進化しすぎた脳』にヒントがないだろうかと思い、読み始めた。

本の中では、脳や視覚に関する様々な実例が挙げられていた。その中から、私が興味を惹かれた二節に重きを置いて述べていく。

一つ目は、『いま』は常に過去」という節だ。この見出しは、英語の講義中にふと考えることのある、時制による文法や分詞形の使い分けに繋がる場所があった。端的に言えば、「今」を認識しようとして認識した「今」は、すでに認識しようと思った時の「今」ではないというものだ。想像しやすい例として本の中では、転がる赤色の球体が扱われている。著者は、脳内の情報処理は、色、形、動作の順に行われ、それぞれが視覚の認識から処理までに異なる時間差が生じてしまうと述べている。

ここで、カッターに繋がれることが一つ分かった。声の認識と処理には約〇・五秒のタイムラグが生じるということだ。なぜこれが繋がるのかというと、プリングは、クルー十二名が艇指揮の掛け声に合わせることに基本とされているが、そもそもそれが大きくずれる原因の一つであったからだ。実際、他校や全日本大会の選手と話すとき、掛け声ではなく特定の選手の動きに合わせているという話を多く聞く。これは、短期間でも可能な意識改善かもしれないと思った。

二つ目の節は、「目が見えていなくても『見えている』」だ。これは、剛速球を扱う球技の選手が感じる「無意識に反応した」という現象の裏付けとなり、視神経の構造に由来する。その科学的な内容はさておき、ヒトという生物に備わる原始的な即応のつくりということに着目した。本では、時速百キロ超の野球ボールを打者が打つ過程で説明されていた。野球の打者は、投手が投げた時にそのボールの色形と動作でボールと認識して体を動かすわけではない。この時、その色形と動作という細かな認識判断ではなく、「何か来る」という原始的かつ重要な判断として処理されるため、文字の処理ほどのタイムラグが生じない。これをオールに当てはめれば、クルー間のコマ数秒のズレが解消されると思った。今の大島のクルーの練度を踏まえれば、舷単位のズレよりも同舷クルー間のズレを確実に解消することの方が先決であるだろう、加えて頭で難しく考えながら漕ぐよりも、本能で漕ぐような方法の方が大島のクルーには合っているかもしれない。そういった意味では、「目が見えていなくても『見えている』」というのは、私にとって非常に役に立つ情報だった。

この感想文で取り上げなかった第二章以外の本の内容も読み通して、総じて一つ言えることがあると思う。受振・認識・判断には、それぞれタイムラグが生じるということだ。夜の海上の視界における例として、緑色の光を見つけ、それを緑色の光として認識する。そして、その緑色の光を船の右舷灯と判断する。この三段階は、一瞬の出来事だとしても、目に光をうけてから舷灯と判断するまでに必ず時間を要する。夜の海上で光っているものを、そもそもその存在に気付くまでに遅くなってしまうのも、この受振・認識・判断のラグによるものと捉えればわかりやすいのではないだろうか。

著者の述べていることと、この本の題名を紐づけると、「柔軟性が求められた分、脳が進化した。」となるのではないだろうか。著者が本の中で挙げるいくつかの実例では、その多くで、脳内の処理に柔軟さを持たせるために設けられたガバつきについての記述があった。本の実例から引用した、転がる赤い球と野球の打者の打つ際に見えるボール、そして、先ほど述べた夜の海における緑光の例。これらを通して、そもそも視界に入ってから認識までに時間を要し、さらに、認識してからそれを物体として判断するまでも時間を要することが分かった。

この本で著者の述べていたことは、格技の対人練習を経験している身として非常に合点がいく内容が多く、そういった経験をカッターにも反映させようと、その方法を探している今の私にとって、とても為になったと感じた。また、見えている「いま」が本当の今でないことなども含め、日常で自分の感じてきたちょっとした疑問が解決した一冊だった。

# 佳作

## 嘘と幻と

『ラブカは静かに弓を持つ』 安壇 美緒 著 集英社文庫  
電子機械工学科3年 岡田 紘

さて、今年の課題本は何だろう。順々に回ってきたプリントに目を落とす。ずらりと並んだタイトルの中に見覚えのあるものを見つけた。

『ラブカは静かに弓を持つ』

去年だか一昨年だかに全国読書感想文の課題図書と間違えて買ってしまった本ではないか。読んだ覚えはあるものの、「スパイものだった気がする」そんな程度の記憶。臆気な記憶を頼りに本棚から青い表紙に薄く埃を被った本を取り出した。

本書は日本における音楽の著作権を管理する全日本音楽著作権連盟に属する橘を書いたものである。著作権侵害の疑いがある音楽教室に生徒として潜入し、その証拠を掴むことが橘の任された仕事だ。過去のトラウマにより不眠やフラッシュバックに悩む橘が僅かに変化していく様子がそこにある。

この本において心休まる瞬間などごく僅かだった。橘は仕事のために人を騙し続けているのだ。淡泊な印象のある主人公だったが、橘が恐怖と戦っている時、安堵している時に私も同じように恐怖し安堵した。その時、私は確かに橘だった。

読み進めながら私は「嘘は何だろうか、それは悪であろうか」と自問した。私も橘と同じ様の人によって見せる顔を変えていると感じているからだ。「人によって態度を変えるな」何度も聞いた叱りの言葉。そう叱る強面の教師も、我が子の前では柔らかな顔を見せている。きっと誰しもそうであろう。母の前では母の息子としての私。友達の前では友人としての私。誰かにとっての私。同じ身体、同じ感覚、同じ人間であるはずなのにどれも違っている。母の前では友人としての私は姿を現さない。他も同じように。

つまりは誰かに嘘をついている。一人でいる時でさえ自分自身に対し見栄を張ってみたり、褒め称えそして貶している。全くの別人の様に自分を叱る自分がいる。いつ何時も誰かにとっての私を演じている。オリジナルの私はどこにいるのだろうか。きっとこれからも見つからないだろう。

ただ、それがある意味での「人間らしさ」なのではないかと思う。動物は嘘をつかないとどこかで聞いたことがある。嘘は人の特権なのかもしれない。それは賢くなりすぎた人間同士が円滑に生きていく為の発明であったろう。これのすべてが悪といえるだろうか。少なくとも私は悪と言いつれない。

自問に対し、嘘とは人間らしさの象徴であり、上手く生きていく上での必要悪と考えた。言い訳かもしれない。しかしそう思う方が生きやすい。嘘は我々に納得を与えてくれる。

終盤、橘の嘘がバレてしまい何もかも崩れ去ってしまうのではないかと手に汗握った。丁度、新幹線に乗っている時に読んでいたのだが小刻みに揺れる列車と心臓が速く大きく鳴っているのが妙に重なり、余計に私の不安を煽っていた。裏切り、関係を絶とうとした橘だったがそう上手くいかない。裏切った仲間に出会ったときのリアルな反応は橘が思うものと違った。

「この脅威は幻だ。」

勝手に抱いた不信と恐怖に支配され、現実が見えなくなる。また私は橘に自分を重ねた。幼稚園からの幼馴染と大喧嘩したことを思い出した。二度と口をきかないと心に誓ったのを覚えている。翌日は部活の試合だった。試合が始まっても彼とは一言も話さぬまま試合が進んでいく。私のアシストで点が入った。ゴールを決めたエースを囲う仲間の中、「ナイスアシスト」そう声をかけてきたのは彼だった。まるで昨日のことなんて覚えていない様な笑顔で。彼は私のことを許せないと思っていると考えていた。しかし十数年も一緒に遊んできたのだ。今更そんなことで関係が崩れるわけがなかった。この時私はずいぶん幼稚だなと思った。勝手に抱いた不信で壁を作っていた。橘ほど壮大ではないが同じだと思えた。信頼は思っているよりも強固なのだな。

ずいぶん久々に読書をした。幼い頃は沢山本を読んでいたので。そういえば本を読まなくなったのはスマホを持った頃くらいからだろうか。それ以来課題でもなければ読まなかった。この本は既に1度読んでいたはずなのに、結末を知っているはずなのに私は必死に次の文字を追った。こんなにも何かに夢中になったのは久々だった。もう一度この本を読む機会があつてよかった。嘘偽りなくそう思えた。

これからは嘘をつくだろうし、自分から真実が見えているはずの目を塞ぐだろう。その時僅かな勇気と納得で大抵の困難は解決すると信じていたい。曖昧なまま歩くのもきっと悪くない。

# 佳作

## 油断が招いた森の罠

『注文の多い料理店』 宮沢 賢治 著 角川文庫  
商船学科2年 高橋 亮

宮沢賢治の『注文の多い料理店』は、いわゆる“教訓めいた童話”の一つだと思っていた。だが、改めて高校生としてこの物語を読み直したとき、ただの「怖い話」や「自然への警告」以上に、人間の心理や社会関係にも深く結びつくテーマが隠されていると気づいた。

物語は、都会の二人の紳士が山奥に狩猟に出かけ、道に迷った末に見つけた不思議な洋風レストラン「山猫軒」に入っていくという筋書きだ。店の中には次々と「注文」が書かれた札がかかっており、それに従って帽子や靴を脱ぎ、顔を洗い、香水をつけるなどさせられる。そして最終的に、彼らは「料理される側」であることに気づき、恐怖の中で逃げ出す。

一見すると、これは「自然の怖さ」や「人間の傲慢さ」に対する警鐘のように読めるが、私が特に注目したのは、“客と店”という関係の逆転に込められたメッセージだ。客であるはずの二人が、次第に「店の命令に従う立場」になり、しかもそれをほとんど疑わず、最終的に自らを“食材”にしてしまいそうになる。この構造を読みながら、私は「人間関係の中で信じる」と疑うことのバランスについて考えさせられた。

現実の社会でも、私たちは多くの場面で「相手を信じる」ことで関係を築いている。たとえば、友人関係や先生とのやりとり、ネット上でのやさしさや言葉もそうだ。だが、その中には、本当は何か別の目的を持って近づいてくる人もいる。そう考えると、「信じること」にはリスクがつきものだ。

物語の中の二人の紳士は、明らかに不自然な注文に対しても、最初は「この店は丁寧で面白い」とすら感じている。だんだん不安にはなるものの、最後まで従い続ける姿勢からは、「相手に従うことで安心しようとする心理」が感じられた。つまり、「信じている」のではなく、「疑わないことで不安を避けようとしている」とも言える。

私はこの部分に、人間の弱さが表れていると思った。情報が多すぎる現代では、何が正しくて何が危険か、自分で判断するのがますます難しくなっている。だからこそ、誰かに「答えをくれる存在」になってほしい、という依存心も生まれる。二人の紳士が、「料理されかけるまで気づかなかった」という展開は、まるで「便利さや親切の裏にある危険に気づかない現代人」を風刺しているようだった。

また、彼らが「都会から来たお金持ちの紳士」という設定も興味深い。都会の豊かさや教養に満ちた生活が、山の中では何の役にも立たず、むしろ「無知」であることが命取りになりかける。これは、「情報や知識を持っているつもりでも、相手のルールの中に入れば、何もわからなくなる」ことを示しているように感じた。山猫軒という空間は、まるで「現実の常識が通じない場所」であり、そんな中で自分の判断力を保つことの難しさを象徴している。

そしてもう一つ印象的だったのは、最後に二人を救う存在として、連れてきた犬たちが登場することだ。物語の序盤では「足手まとい」だとされていた犬たちが、最終的に命を救ってくれるという展開は、非常に象徴的だと思う。これは「役に立たないと思っていたものが、実は一番大切だった」というメッセージにも読めるし、「自分よりも下に見ていた存在に助けられることもある」という人間の驕りへの皮肉でもある。

読後、私はこの物語が「自然への畏れ」や「人間の傲慢さ」だけでなく、「信じすぎる危険性」や「他者への依存」の怖さを描いていると感じた。生きていく上で、人を信じることは必要だが、同時に「本当にそれでいいのか」と一度立ち止まって考える力も必要なのだと思う。どれだけ相手が丁寧で親切でも、それが「本当に自分のためかどうか」を見極める目を持たなければ、簡単に飲み込まれてしまう。現実の社会もまた、見た目の優しさや便利さの裏に“注文”が隠れていることがあるのだから。

宮沢賢治の物語は、子ども向けに見えて、実はとても深い社会的なテーマが込められている。『注文の多い料理店』を読んで私は、「信じる」と「疑う」のバランスを考えながら生きていくことの大切さを学んだ。そして、どんな場所でも、誰と接していても、自分の頭で考え、判断する姿勢を忘れないようにしたいと思った。

# 佳作

## 孤独を超えて

『ラブカは静かに弓を持つ』 安壇 美緒 著 集英社文庫  
情報工学科1年 平山 夏音

安壇美緒さんの小説『ラブカは静かに弓を持つ』は、スパイと音楽という一見異質な組み合わせが、静かに内に抱えている感情と響き合う深い物語だった。主人公、橘樹は、著作権団体に所属する青年であり、幼い頃トラウマを抱え、チェロを手放した過去を持つ。しかし、仕事のために身分を偽って音楽教室へ潜入する中で、再びチェロと、そして人と真摯に向き合うことになる。

冒頭で描かれる橘の孤独と閉ざされた心は、「深海の悪夢」に例えられ、その透明で重い静けさが冒頭から読者の胸に押し寄せてくる。彼は人を信用できず、眠れない日々を送る「根暗で真面目な青年」として描写され、その姿に強い共感を覚えた。自分にとって大切なものほど手放してしまうことで、心の表面には冷たい硬さがあり、自らを「ラブカ」のように孤独な存在だと誤解している。その誤ったセルフイメージが、物語の核心だと感じる。

しかし、物語は音楽教室での出会いをきっかけに、橘の心を少しずつほぐしていく。講師の浅葉や仲間たちとの交流を通じて、チェロを再び手にすることによって、自分を取り戻していく橘の姿には、本当に手に取るように感じられるリアルさがあった。音楽は橘にとって「ただの演奏」ではなく、心の奥底と他者との繋がりを取り戻す道具でもあった。ある劇的なシーンでは、不眠外来の医師に打ち明けたことで、「視野がぱっと開けたような感覚」が描かれている。その瞬間から、世界への境界線が少しずつ曖昧になるような、名状しがたい感覚描写にゾクツとした。また、他人に思いを届ける演奏を意識するようという浅葉の「ちょっと遠くの小窓の向こうに音を届けるように弾いてみて」という助言も、橘の閉じた心を少しずつ開くきっかけとして印象的だった。

物語の骨格には、スパイという立場から来る強い葛藤があった。橘は本来の自分を偽ることで始まった関係が、相手との信頼に変わっていくことに苦しむ。そんな中で、最後に彼が証拠を消し仲間との関係を守ろうとしたのは、ただの「仕事」としての判断を超えた人間としての優しさや勇気を感じた。しかし、その直後に浅葉に正体がばれてしまい、信頼関係が崩れる痛みも描かれる。裏切られた側の怒りと、裏切った側の苦悩が交錯する描写には心が締め付けられた。

そこから再び浅葉のもとに戻るという決断は、橘の内面をさらに深く掘り下げた瞬間だった。そして、その橘の判断は、単なる和解ではなく、「人とつながることをもう一度選んだ」という彼の決意の表れだと思った。人と関係を紡ぐことを諦めない姿は、読者に強い希望と静かな感動をもたらす。レビューには、「ハッピーエンドではないが新たなスタートとしての終わり」として心に残ったという声もあり、まさにその通りだと思った。

読み終えたあと、私は「自分にとって音楽とは何か、人との信頼とは何か」と考えさせられた。私はチェロも弾けないし、スパイ活動とも無縁だが、それでも橘の孤独や葛藤は誰にでも通じる日常的なものだと思う。「大切なものほど失ってしまうのではないか」「心を開いたら裏切られるのではないか」という不安は、多くの人が抱えているはずだ。だからこそ、この小説は読者に寄り添い、静かに背中を押してくれるのだと思った。また、「ラブカ」という深海魚を象徴に選んだことも印象的だった。見た目は不気味でも、深海で生き続ける強さを持つラブカは、橘そのものだ。そして彼が最後に「孤独なラブカ」ではなく「人と響き合う存在」へと歩み出した姿は、私にとって希望の象徴になった。

『ラブカは静かに弓を持つ』は、静かな音楽の響きと信頼の間を揺れる橘の心を丁寧にすくい上げる作品だった。「ラブカ」というタイトルが象徴するように、静かで醜い深海魚と思い込んでいた橘が、実は等身大の人間の葛藤を抱えた存在として美しく浮かび上がってくる。その過程こそ、この物語の最大の魅力だと私は思う。感情表現がストレートで繊細で温かく、そして痛みも含まれる物語だった。自身の殻を破れない人、自分を信じられない人にこそ読んでほしい作品だ。音楽の力、そして人とつながる勇気を、静かに、しかし確かに教えてくれる一冊だった。

# 第5回読書ラリー優秀者発表

良書に親しみ教養を高めることや図書館利用を促進することを目的として、第5回読書ラリーを令和7年12月8日（月）～令和8年1月8日（木）の期間で開催しました。今回は、昨年度実施した期間中に読んだ図書感想・推薦文の作成数に、新たに図書や図書館に関するクイズの正解数及び図書館来館日数をポイントとして加え、上位得点者を表彰する方法で実施し、令和8年2月4日（水）に最優秀賞3名、優秀者5名を表彰しました。

## 最優秀賞

商船学科5年	森松 豊
電子機械工学科3年	森松 佑月
商船学科1年	古賀 有美

## 優秀賞

情報工学科3年	樋口 聖人
情報工学科3年	杉谷 篤人
商船学科3年	佐上 茉香太
情報工学科3年	倉本 悠雅
商船学科1年	釜井 咲音



読書ラリーの表彰

教員推薦図書

## 地球 —その中をさぐる—

加古 里子 文／絵  
福音館書店

商船学科 酒井 秋絵

中学校の理科で学んだ岩石のことを覚えていますか。本校のある周防大島には花崗岩が広く分布し、内陸の玖珂地域へ進むと、その種類や年代が帯状に変化していきます。一方、北西には、かつて暖かい海のサンゴ礁だった石灰岩でできた秋吉台があります。これらの岩石は、南海トラフに代表される海洋プレートの沈み込みや島弧の火成活動によって、日本列島が成長してきた証拠です。山口県の大地は、まるで日本列島の歴史を横から切り取った断面図のように、古いものから新しいものへと並んでいます。

かこさとしの『地球』は、こうした地球内部のしくみや大地の成り立ちを、正確でありながらも親しみやすい絵で描いた絵本です。地震や火山、津波、土砂災害といった現象も、長い時間をかけて大地をつくってきた営みの一部です。この絵本は、私たちの足元の大地がどれほど壮大な歴史の上に成り立っているかを実感させ、自然を「こわいもの」から「おもしろいもの」へと見方を変えてくれる一冊です。



学科推薦図書コーナー

教員推薦図書

## 「もう差別なんてない」と思っているあなたへ

### アメリカの経験から日本の現在と未来を考える

森川 美生・大森 一輝 著  
小鳥遊書房

一般科目 中原 瑞公

本書は、主にアメリカ合衆国の人種差別と性差別に着目し、「差別とはなにか」「どのように差別に抗っていくか」という問いへの答えを考えることを目的としています。

本書の最大の特徴は、差別を個人による言動だけでなく、社会のしくみのなかに埋め込まれたものとして捉えていることです（このような差別の形態は「構造的差別」あるいは「制度的差別」と呼ばれています）。つまり、「する／しない」の次元を超えて、差別を社会のなかに「ある」と考える見方を提示しています。たとえば、特定の人種・民族ルーツをもつ人びと（だけ）が警察から不当な取り調べを受けたり、暴力を振るわれたり、場合によっては殺されたりする事例は、マイノリティの人びとを危険視したり、犯罪者扱いしたりする警察組織全体の問題、ひいては社会全体の問題です。

差別について話をするとき、私たちは「差別なんてもう存在しない」「私は差別していないし、差別されていない」「私たちのほうが差別されている」「差別などと騒ぎ立てるから差別が起こるのだ」「差別ではなくて区別だ」などと言うことがあります。差別の事実そのものを否定し、差別を経験している人たちを責めるのではなく、本書を通して、「どうすれば差別をなくし、みんなが暮らしやすい社会をつくることができるのか？」という問いについて考えてほしいです。差別に抗うということは、差別を経験している人たちだけでなく、これからの「生きづらい」日本社会を生きる私たち全員に関わることなのだから。

# ブックハンティングに参加して

自分の好きな本や気になる本を、自分で手に取り選ぶということができて楽しかったです。私は初めてということもあり欲しい本を見つけることが大変だと感じました。大きな本屋なので自分の選びたい本が置いてあったことが嬉しかったです。また機会があったら是非参加したいです。

商船学科 1 年 古賀 有美

ブックハンティングに参加し、非常に有意義な時間を過ごせました。書店を巡りながら、普段手に取らない本に出会い、新たな視点を得られたことが印象的です。友人と本を選ぶ機会などそうそうないのでとても楽しかったです。

情報工学科 1 年 友森 優衣

僕は去年もブックハンティングに参加していたので、去年よりスムーズに本を選べました。今年は僕が興味をもったり、苦手な教科についての本を多く選びました。小説も選ぼうとしたけど、探していた本がなかったので諦めました。また、行く機会があれば探してみたいです。

電子機械工学科 2 年 居藤 彰汰



初めてのブックハンティング、とても楽しかったです。大きな書店に行ける機会はありませんのでとても貴重な体験ができました。自分の欲しい本がどこにあるのか探すのが大変でしたが、探している過程で普段は手に取らないジャンルにも目を向けることができ、新しい発見や出会いがたくさんありました。本を自分の手で選ぶ楽しさを改めて感じることができました。

電子機械工学科 1 年 柳原 優菜

今回で 2 回目のブックハンティング参加となり、前回よりもリラックスして本を選ぶことができました。自分の興味だけでなく、他の人にも読んでもらいたい本を意識して選ぶようになり、選書の視野が広がったと感じます。図書館に自分が選んだ本が並ぶ喜びを再び味わえ、とても充実した時間でした。次回もぜひ参加したいです。

商船学科 2 年 大宅 巧真

去年も参加したのですが、本の種類の豊富さには驚かされます。本が見つからないとき、自分で検索することができるので、見つからない本を瞬時に検索出来てとても便利だなと思いました。今回は、自己啓発本を多く選んだので、是非、気になる人はぜひ読んでみてほしいです。

情報工学科 2 年 寶井 萌々子

普段行く機会の少ない大きな書店に行けてうれしかったです。最近、ネットなどで本を購入することも多く、書店で本を選ぶという体験は楽しいものでした。たまたま目に入った本を手にとってみたり、めくってみたりすることや、決めていた本を探して歩くことは、実際に書店に行かなければできません。書店の中を歩くことは、冒険のようでとても楽しかったです。

商船学科3年 草野 慧莉

ブックハンティングで購入したい本は事前に決めていたのですが、専門性が高く、残念ながら見つけることができませんでした。普段はネットで本を買うことが多い私にとって、実際に本を手にとって選ぶことは、本の装丁や質感、雰囲気など、オンラインでは気づけない魅力を感じることができました。探していた本はなかったものの、本と向き合う良い機会になり、とても楽しく有意義な時間を過ごせました。

情報工学科3年 岩政 佑樹

前回、ブックハンティングに参加しました。今回が二回目の参加になりますが、前回をきっかけに本を読み始めました。この一年間、本を読んでみて感じたのは、本は自分にはない知識や価値観を知ることができる、とてもコストパフォーマンスの高いものだということです。作者が生涯を通して感じたことや築いた価値観が詰まった本を、私たちは一週間、早い人なら一日で学ぶことができます。これは本当に素晴らしいことだと思います。今まで本を読んでこなかったことを、この文章を書いている今、心から後悔していません。

電子機械工学科4年 上村 輝

今回初めてブックハンティングに参加させていただきました。初めての経験で、とても新鮮でした。図書館に置く本を選ぶ行事なので、いろいろな本に触れ合うことで、資格や、もともと興味がなかった株などに、興味を持つことができました。自分の知見を広げることができたし、普通に楽しかったので、参加できて本当に良かったなと思いました。なので、これを読んでいただいている皆さん、是非、来年は参加してみたいと思います。

電子機械工学科3年 阿部 雄也

今回初めてブックハンティングに参加しましたが、思ったより広くて非常に驚きました。8階も行って良いと知らず、時間のほとんどを7階で過ごしていました。ですが、今回自分が求めていた本は8階が主だったので、次またブックハンティングをする時は8階もちゃんとみたいと思いました、今回のブックハンティングを通して思ったことは、もっと色んな小説を読んで、図書の楽しさを知って、色んなジャンルの本を選べるようになりたいと思いました。

商船学科4年 小田 連太郎

普段はある程度決まったジャンルの本ばかりを読んでいます。ブックハンティングでは「図書館に置く本」という視点から選ぶため、自然と普段は手に取らない分野にも目を向けることができました。その結果、これまで興味のなかったジャンルにも関心が湧き、新しい読書の入り口になったと感じています。また、他学年の参加者と、読書という共通のテーマを通じて交流できたことも、貴重な経験となりました。

情報工学科4年 倉増 風紗

私は寮生活をしていることもあり、日常的に本屋に行くことがなく、本を探す際はインターネットで関心があるものやおすすめに出てくるものばかり選んでいました。そのため今回のように大型店舗で膨大な量の本の中から実際に手に取って選書をするのができ、楽しかったです。選書した本が図書館の利用促進の一助となれば幸いです。

電子機械工学科5年 岡崎 隼也

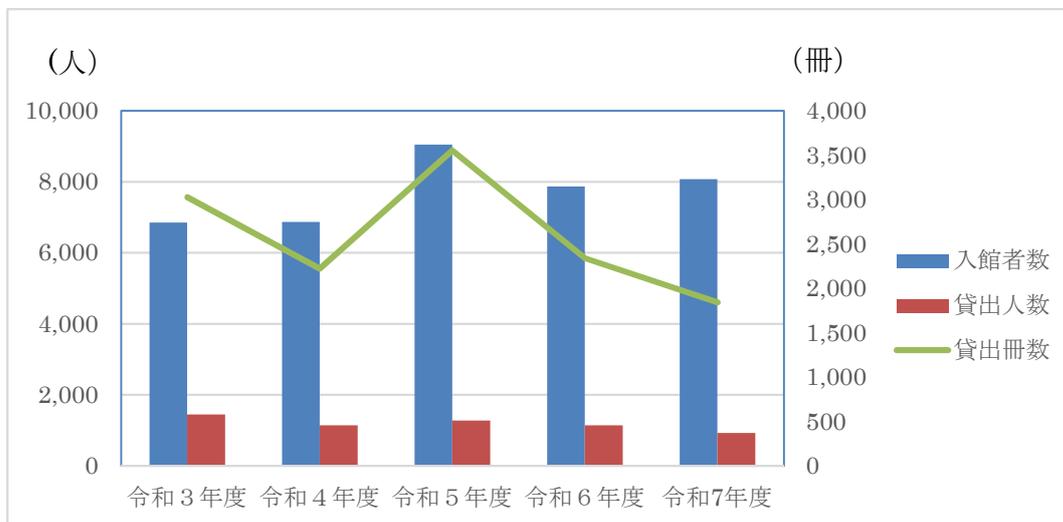


ブックハンティング参加者

## 図書館利用状況

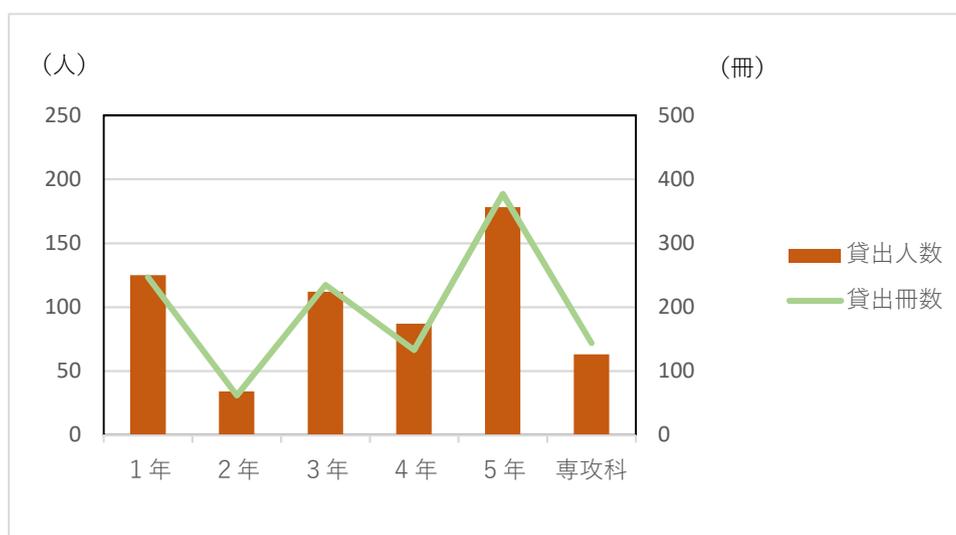
令和8年1月31日現在

### 年度別入館者数・貸出人数・貸出冊数



	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度
入館者数	6,847	6,864	9,045	7,861	8,072
貸出人数	1,443	1,140	1,272	1,133	924
貸出冊数	3,028	2,221	3,552	2,338	1,842

### 令和7年度学年別利用状況



	1年	2年	3年	4年	5年	専攻科
貸出人数	125	34	112	87	178	63
貸出冊数	247	62	235	133	377	144



大島商船高等専門学校図書館だより 第34号

2026年（令和8年）3月12日発行

編集者：大島商船高等専門学校図書館運営委員会

発行者：独立行政法人国立高等専門学校機構

大島商船高等専門学校

〒742-2193 山口県大島郡周防大島町大字小松 1091 番地 1

電話（0820）74-5454（図書係）

<https://www.oshima-k.ac.jp/campus/facility/library/>